

第22回島根県民文化祭文芸作品 一般の部 知事賞及びジュニアの部 大賞 作品と選評

●一般の部 知事賞

【短歌】

老舗なる時計屋にありしぶっち馬閉店のあと行方を知らず 新谷 国子

「ぼっち馬」というのは飾り時計でしょうか。古い時計店の看板代わりに親しまれていたのか、それとも〈私〉が心の中でいつも気に掛けていた時計の一つなのかかもしれません。その時計店が閉店したあと、〈私〉はその行方に思いを馳せます。読者にも、ぼっち馬がひとりでとぼとぼと（あるいは飄々と）どこかに歩いて去つていったように思われ、〈私〉とおなじような寂しさを感じさせます。ぼっち馬の方がわれわれを置き去りにして去つていったかのような。背景にあるだろう過疎の町の状況も含めて、こういうふうに読者を一首の物語のなかに巻き込む歌の力を改めて感じます。

【俳句】

産声は村の元気よ鯉幟 廣澤 幡子

過疎高齢化、少子化、農業の担い手不足など日本を取り巻く現状は大変厳しいものがあり山陰地方はこのような波を諸に受けている。そうした中にあって、一人ひとりは日々持ち場持ち場で懸命に生きている。掲句、産声は村の元気よと村の宝・子供の誕生を祝う心持が季語の鯉幟とよく響き合いすっきり詠まれている。故郷の応援歌である。

【川柳】

甲子園終わればそこに小さい秋 小林 延子

夏の甲子園で、大社高校が、九十三年ぶりに八強入りの快挙。県民も熱狂的で、爽やかさを提供して話題になった。加熱気味だった「サウスポー」の応援曲と、飛び跳ねる姿も勇気と感動を与えたが、ふと気付いたら秋風が、過熱気味のあの夏は終わったのです。

【詩】

『嘘をついたら駄目だがね』 内田 厚子

父に結婚を反対されたときの思い出がリアルに描かれていて、その成り行きに引き込まれます。題になったこのフレーズには亡夫君の誠実さと愛情が溢れています、姿勢を正される思いです。後半がやや緩みますが、素直な心情が充分伝わる作品です。

【散文】

「ロングインタビュー」 塩田 直也

書店の閉店。紙本の読書愛好家にとってショッキングな出来事だが、現実に起きている。不登校の過去を背負いながら人気漫画家として活躍する主人公が、地元の書店を救うストーリー構成が素晴らしい。また、それを記者とのインタビューで紡ぐ表現手法に作者の工夫がみられる。昨年度受賞された作品の連作、或いはスピノオフ作品としても楽しく読める。書き続けてほしい。

●ジュニアの部 大賞

【短歌】

「うるさい」と言った私が大きな穴母の器は私の倍だ 川上 羽起

〈墓穴を掘る〉という言い回しを連想しました。自分が母親に「うるさい」といったけれど、かえって母親の器の大きさを思い知った、というところでしょうか。あらためて、まだまだかなわないなあという尊敬の気持ちが、とてもよく伝わって来ます。

【俳句】

秋晴れやお米たちたる炊飯器 斎藤 彩芽

晴れ渡る秋の一日、今新米がほくほくと湯気を立て炊き上がる。収穫の喜び、爽やかな秋天を愛でる景をよく詠まれている。きっと温かなご家庭であろう。幸せが零れ落ちそうな一句である。

【川柳】

スイミングしんきゅうテストがんばるぞ 白井 小弥

川柳は自分の思いを、自分の言葉で、素直に読むことが大切。しんきゅうテストに、まっすぐ向かう姿勢が表れていて、とっても良い作品に仕上りました。

【詩】

『まだまだ』 石原 蒼将

題が素敵ですね。作品の中でも二回使われていますが、「まだ」を重ねて独立した一行にしたところが大正解です。金魚とトンボを愛情を持ってよく観察しているようすが窺えます。

【散文】

『僕と教頭先生』 駿場 大輔

作者が通う小学校の教頭先生との、心の交流が描かれている。ハートウォーミングな作品だ。日々の何気ないやりとりの中に、真の師弟関係が潜んでいることに気づかされる。文章の丁寧な記述ぶりにも、好感が持てる作品である。